

ロボカップ 2011 イスタンブール世界大会レポート

今年で15回目となるロボカップ2011イスタンブール大会(RoboCup2011 Istanbul)は、7月5日から11日まで、トルコのイスタンブールエキスポセンターで開催された。日本からは、東日本大震災と原発問題への対応や影響を受けて参加を断念したチームもあったが、シニアリーグに22チーム、ジュニアリーグに30チームが参加した。

林原靖男(千葉工業大学) / 大橋健(九州工業大学) / 成瀬正(愛知県立大学) / 武村泰範(日本文理大学) / 河原林友美(福井高専) / 内種岳詞(大阪大学) / 大金一三(新潟工科大学) / 伊藤暢浩(愛知工業大学) / 植村渉(龍谷大学) / 野村泰朗(埼玉大学)

ロボカップ サッカー

ヒューマノイドリーグ

ヒューマノイドリーグは、人型ロボットが自律でサッカーを行うリーグで、ベストヒューマノイドにはルイ・ヴィトンカップが贈呈される。2009年から60cm以下のキッドサイズ、80~100cmのティーンサイズリーグ、130cm以上のアダルトサイズリーグに分かれて競技を行っている。キッドサイズは最も参加チームの多いリーグで、24チームが頂点を目指して凌ぎを削った。サッカー3on3では、昨年



キッドサイズリーグ 3on3の試合

度4位のTeam DARwInが優勝を飾り、連勝を続けていたDarmstadt Dribblersは3位という結果となった。決勝では、ジャパンオープン優勝の千葉工業大学のCIT Brainsとの戦いとなったが、安定かつムダのない動きを見せたDARwInが圧倒する形となった。テクニカルチャレンジは、スローイン、障害物ドリブル、ダブルパスの3つの競技の合計で競われるが、こちらはDarmstadt Dribblersが1位を飾った。CIT Brainsはこちらでも3位に入賞している。ティーンサイズリーグで



ヒューマノイドリーグに参加したロボットたち

は、昨年度からサッカー2on2が始まったが、3チームのみの参加となった。優勝はNimbRoで昨年と同様安定した動きを見せていた。アダルトサイズのテクニカルチャレンジでは、大阪大学と大阪工業大学の合同チームJoiTechが1位を獲得した。ドリブルアンドシュートでは、CHARLIが優勝を飾り、さらにベストヒューマノイドの栄冠も獲得した。結果的に、Team DARwInとCHARLIを率いるVirginia TechとUniversity of Pennsylvaniaの躍進が目立った大会であった。特に、ROBOTISと開発したDARwIn-OPは優れたハードウェアで、3kgを切る軽量のロボットが軽快に動きつづけていた。バッテリーのチャージはパソコンと同様ACアダプタで行えるようになっている。歩行制御、画像処理、人工知能などをバランスよく統合しており、今後の標準的なプラットフォームとして各チームが採用していく可能性があると思われる。

標準プラットフォームリーグ

標準プラットフォームリーグ(Standard Platform League)は、Aldebaran Robotics社製小型人型ロボットNAOを用いて4対4でサッカーを行うリーグである。NAOが採用されてから4年の間にロボット自体も安定して動くようになっており、試合のレベルも4足のAIBOで試合を行っていた頃を彷彿とさせるところまで進化している。

写真では、決勝戦でB-Human(ピンク)がシュートを決めるシーンであるが、キーパーもボールをちゃんと捉えている。優勝

B-Human, 準優勝 Nao Devils はともにドイツのチームであるだけでなく、4位以内のチームは全てドイツ製のプログラムをベースにしておりドイツの圧勝であった。

小型ロボットリーグ

終わってみれば今年もSKUBA(タイ)だった。3連覇。圧倒的な強さだった。2位グループは5~7チームが競っているように見えるが、その中では準優勝したImmortals(イラン)が頭一つ抜き出ているようだ。今年は、CMDragons(米国)が参加を取り止めたため、SKUBAのダントツ勝利となってしまった。小型ロボッ

トリーグは、11か国20チームが参加した。イラン4チーム、日本3チーム、ドイツ、コロンビア、トルコ、アメリカ各2チーム、中国、タイ、カナダ、メキシコ、ブラジル各1チームである。イランは



標準プラットフォームリーグ決勝